



邊士來曼
 八年報文
 後編

は

3898



414
A 4026



大正十一年四月
侯爵邸寄贈

千八百七十五年第七月廿八日「ビバイブト」近傍ノ
露塔ニ於テ

呈

開拓長官黒田清隆閣下

第七月廿日(此日本日迄)報文并ニ「マクニベツ」煉田ノ
報文ヲ閣下ニ郵送セリ余ハ補助手ト共ニ平岸村近傍
札幌以南凡ソ三「マイル」(一里ニ分五里ナリ)ナル鐵鑛
即チ澤鐵地ヲ見分ノタメ同所ニ赴ケリ但シ補助手ノ
内桑田前田ノ両氏ハ鐵鑛ヲ十「フ」露出セシムルガタ
メ豫メ地ヲ堀ル等ノ「ア」ラニ「ア」ラテ慮リ前日人夫ヲ率
ヒテ該地ニ至リ畧鐵鑛ヲ測度シ見取圖ヲ持帰レリ
平岸村ハ廣キ街道ノ左右ニアリテ長サ一「マイル」餘ノ
開墾地ナリ街道ノ中央ニ小堀割アリ豊平ノ枝川精進

月石史

河魚深アリ魚ノ入ルヲ遊ル故ニ此名アリヨリ水ヲ入
レ北ノ方豊平川ニ出ツ○此村ノ南端ヨリ半「マイル」許
ニシテ掘割ノ側面下底及ヒ澤地ノ如キ林中ニ景モ近
キ鐵鑛場アリ然モ夜未暴雨ノタメニ流水膨脹シ只鑛
ノ頂一二寸ヲ見得シノミ然レトモ素田氏ハ前日注意
シテ之ヲ測度セシニ鑛ノ厚十八二尺五寸ニシテ其上
ニ恐ラク赤褐色ノ「コロム」^露一尺ヲ蒙リ又其上ニ土壤
ニ尺五寸アリテ穴ノ深ナ総テ六尺鑛ノ下ハ砂状粘土
ニシテ小石ヲ混シタル者タルヲ發見セリ○掘割ニ沿
ヒ北ノ方十五「ヤルト」許ニ僵木ノ翻根ニ依リ更ニ鐵鑛
ヲ露出セル一所アリキ然レモ未タ之ヲ掘リ試ミザリキ
實ニ素田氏カ穴ヲ掘リタル所ヨリ北ニ九「ヤルト」五「ヤルト」
ノ間ハ曾テ掘割ノタメニ揚ケタル土中ニ鐵鑛ノ小塊

許多アルヲ見タリ然レモ其方向七十「ヤルト」先ニ至テ
ハ亦アルヲ見ス南ノ方モ五十「ヤルト」間ハ鐵塊許多ナ
リト雖モ七十「ヤルト」及テハ全ク其痕跡ヲ見ス○
鑛ハ堅キ褐色ノ「ヘマタイト」ナレトモ小孔多ク目方輕
キカ如シ石搗氏之ヲ折セシニ鐵分凡ノ百分ノ五十
六ニシテ燐^{リホスホ}ノ多量ヲ含メリトノ説ヲ聞ケリ余
ハ其舎窓家トシテ信用スヘキ人物ナルヤ否ハ之ヲ知
ラズト雖モ既ニ昨秋モ演述セシ如ク此鑛ハ他ノ鐵鑛
ノ如ク燐ノ量多カルヘキニ對其質ハ甚タ惡シトス
鐵鑛ノ全量ヲ確知スルハ容易ノ業ニ非ス然モ其量ハ
甚タ少ナキコト明ラカナリ蓋シ此鐵鑛ハ澤中ニ於テ成
レル者ニシテ恐ラク火山石ヨリ出タル「マク子」ニツキ
鐵沙ノ沖積セル者ナラン其故ハ該所沖積層中ニ「和ミ

ユスル其他火山石ノ片塊許多アルヲ以テナリ(殆ド方
今ノ地面(ホタ澤地タルヲ免カレズ)ト並行スルニ似タ
リ
澤ノ諸方ニ許多ノ深穴ヲ掘ルニ非ナレハ素ヨリ其鑛
層ノ大小厚薄ヲ鑑定シ得ズト雖氏幸ニシテ堀割アリ
多ク検査ニ困難ナルノ場所ヲ明示セリ此堀割ハ此鑛
層ヲ殆ント直線ニ横斷シ且ツ他ノ方向ニ於ルモ其廣
狹厚薄ニ至テハ此堀割ノ方向ニ於ルト相等シキカ如
ク臆測セラル、ニ甘實際上其廣狹厚薄ハ前条ニ連ル
所ヨリ大ナルニモアラヌ又小ナルニモアラザルベシ
故ニ此層ハ直径只百「ヤルト」許ニシテ其中央ハ二尺五
寸ノ厚ナニシテ四方漸ク薄ク末端ニ至リテハ全ク消
滅スルモノナラフニ是ヲ尺ニスレハ恐ラク七十方尺ノ

鑛ヲ得ベク即チ目方(此多孔ナル鑛ヲ一方尺ニ甘水量
ノ二倍トスレハ)四百噸ヲ得ルナラシ此算當ハ素ヨリ
甚タ粗漏ナリトイハレ其量ノ甚タ些サニシテ尚深ク
調査ヲ為ノ價ナキヲ示スニ足ベシ
該一所ヨリ南ハ九一「マイル」許ニ木履師ノ家アリテ其近
傍ニ又同質鐵鑛ノ露出セル所アリ然レ氏雨水ノ為ニ
通路絶ヘテ該一所ニ至ルヲ得ズ故ニ案内者一兩名ト共
ニ澤ヲ涉リ空ノ道ヲ求ル丁三時間雨ニ遇テ右邊ニ斷
念シ此検査ヲ察止セリ但シ桑田氏ハ前日須要ノ測度
ヲ為タリ同氏ハ木履師ノ家及ヒ精進河(此所ニ於テハ
南東ニ向テ流ル)ヨリ南西ハ九ノ百尺ナル平地ニ一穴
ヲ掘リ茲ニ鑛ヲ察見セリ○鑛ハ地面ヨリ九ノ三尺下
ニアリテ側面ヨリ之ヲ見レハ形凸鏡ノ如ク中央ノ

厚サ一尺ノ十分ノ六分ニシテ穴ノ両側ニ至テハ薄ク
シテ小刀ノ及ノ如シ鑛ノ層上ニ暗褐色ノ霉土恐ラク
一尺アリテ其上ニ土壤アリ鑛ノ層下ニハ恐ラク黄色
ノ粘土一尺アリ其下ハ砂状粘土ナリ其量ノ如キハ他
所ヨリモ少ナキカ如ク全ク無用ノモノ、如シ若シ此
層果シテ廣大ナリセハ近傍ノ川岸又ハ河床ニ必ス其
痕跡ヲ見ナル丁ナカルヘシ

第七月廿一日雨天タルヲ以テ花畔及ヒ石狩近傍ノ鐵
鑛ヲ検査スルヲ止メ圖引等ノ舎業ニ従復セリ○夕ニ
至リ嚮ニ余ニ通達アリシ如ク(幌内(或ハ「イ」ニキレリ)
ヨリ石狩河迄石炭道ヲ測定スヘキ旨電信ヲ以テ閣下
ヨリ請求セラレタル由ノ傳達アリコ、ニ於テ鐵鑛地
方今ノ換採ヲ以テ見ルニ其量少クシテ質モ亦良ナラ

ナルカ如シ)ノ検査ハ他日乾燥便宜ノ時節ニ譲リ其行
ヲ断念シ速カニ石狩出發ノ月意ニ取裁セリ

第七月廿二日「タラニ」ツトノ羅針盤ヲ以テ我カ三稜
鏡針ヲ試シ桑田、三澤、賀田、前田、西山諸氏ニ(此人々ハ直
ニ發見シ昨年起業セシ「ビバイ」以北空地方面ノ測量
ヲ連續シ餘人ハ最初余ト共ニ道路測量ヲ為スヘキ者ト
セリ)與ル命令書ヲ認メタリ而テ餘日ハ荷物ヲ造リ
旅行ノ月意等ニ消失シタリキ

第七月廿三日 余ハ、稻垣、高橋、阪島、山際諸氏ト共ニ札
幌ヨリ一里ナル豊平河岸ヲ未村ニ至リ丸木舟ニ駕シ
一同出發セリ蓋シ温良ナル會計官(此人物ハ當春中本
使カ余ニ逆フノ私情ヨリ)政府ノ利益ニ念及スル丁少
キカ如ク)一ヶ年半余ト同行シ景モ満足ヲ與タル秀逸

ノ者ト交換セラレタルナリノ事ニ練磨セサルト(入用
ナル事業ニ於テ)十才ナラナルトニヨリ出祭非常ニ晚
カリキ然モ凡ソ十六「マイル」ヲ旅行シ石狩河上幌向太
ヨリ一里半ナル所ニ即夜露営スルヲ得タリ
余ハ馮耒村ニ於テ昨年^モ過多ニ茂生シタリキ稷ノ全
ク失テ大麥ニ代ヘラレタルニ驚キ之ヲ糺セシニ大麥
ハ稷ヨリモ産出ノ額多シト又當年ハ小麥ヲモ少シク
蒔付タリト云

翌日午前(第七月廿四日)只四「マイル」(一里半)許ノ旅行
ニシテ石狩河岸幌向河口ヨリ上流二百「ヤルト」計ノ所
ニ野営ヲ張リ林中ニ歩行シ地勢如何ノ見分セリ我輩
午後ニ至リ我等カ所持セル景上ノ地圖ニ依テ推察セ
ラル、丈ヲ試ミニ直線ヲ幌内ノ方ニ切リ始メタリ然

ルニ晚景賀田氏來訪シ(東田氏ノ連ハ當日札幌ヲ祭レ
我等ヨリ少シ下流ニ露営セリ)我等カ是迄幌内ノ位置
ニ付聞タル所ニ有益ナル改正ヲ加ヘタリ昨夏幌内ヨ
リ石狩河迄線路ヲ切タル補助手等ハ東京ニ於テ其石
狩河ニ達シタル場所ヲ示スニ於テ大ニ誤謬ヲ為セリ
賀田氏カ同伴セル人夫中ニ此線路ヲ切リタル連ニ隨
行セル者一人アリテ其者ハ石狩河ヲ熟知セリ同氏此
者ニ付其線路ノ河ニ達シタル確實ナル場所ヲ問キ得
タルナリ但シ同氏ノ連ニアル他ノ日本人夫一名ト余
カ連ニアル一土人ト其確實ナル旨ヲ保證セリ○翌朝
第七月廿五日(日曜日)使ヲ以テ人夫ヲ催促シ未ルニ及
テ圖上ニ稍確實ニ其場所ヲ改メ記スルヲ得タリ之
ニ依テ圖上幌内ノ位置ハ幌向太ヨリ隔ルヲ殆ト二里

トナリ「ビバイブト」ハ石狩河ヨリ石炭地迄直線ニシテ
幌向太ヨリ近キ一里以上ニ及ヘリ○余カ連ニ灰色ノ
鬚ヲ生シタル利葎ノ一土人アリ下石狩ニ成長シ其地
勢ヲ熟知セルノ名高シ余此土人ト共ニ我カ野營ニ近
キ間濶ナル澤地ニ赴キ彼カ遙「ビバイ」山及ヒ「イナキ
シ」レノ河原ヲ指ス所ヲ見ルニ圖上新ニ改正セル一所ト
符合セリ蓋シ直線ニ幌内ニ至ルニハ澤ノ廣キ部分ヲ
横断セザルヲ得ヌ又之ヲ廻ル時ハ道程甚ダ長遠ナリ
土人曰ク「ビバイブト」近傍ヨリ直線ニ横断スレハ澤地
ナシト然ラハ河ヲ航スルノ長キモ堅固ナル地ニ就テ
捷徑ヲ求ルニ若カナルカ如シ彼レ彼レ復タ曰ク「ビバイ」ダ
ツ「ブ」近ハ「エバツ」ノ河口ニ近キ場所ニ於ルト浅深相同
クシテ之ヨリモ浅カラズ而テ洧水ノ時兩所トモ十尺

ノ水アリト云ヘリ是レ我カ昨年ノ深淺測量ニ符合セ
リ
石狩河ハ幌向太ニ於テハ洧水(六七月ト満水トノ差十
五尺トリト而テ我カ至リレ頃ハ洧水ノ記号五尺上ナ
リキ○我連中ノ内尺度ヲ記タル新シキ抗ヲ見タルニ
水ノ深ナニ尺ヲ示シタリ
第七月廿六日我等ハ河ノ真南ニ流ル、点ヨリ九ノ真
東(羅針ノ南八十五度東)ニ線路ヲ切り始メタリ而
シテ進ム「」尺八百尺ニシテ廣濶ナル一ノ澤ニ出テ遙
カニ連山ヲ見テ得タリ是ニ於テ此地方ヲ熟知セル我
土人ニ協議シ幌内平原(我等ハ此原ヲ精密ニ示セル
圖ヲ所持セナリキ)ニ入ノ捷徑ヲ求メタルニ彼ハ南ハ
三十度ノ点ヲ確指シ其誤リナキヲ保証セリ故ニ河流

ト直前ヲ為セル点ヨリ新タニ線ヲ起シ其方向ニ切リ
始メタリ然ルニ行クホタ一マイル(景初八百尺ノ外
ハ開潤チル澤地ナリキ)ニ至ラズシテ出口ノアラガ
大池ニ出タリ然レトモコハ右方へ轉スル四百尺ニシ
テ之ヲ過ルヲ得タリ但シ更ニ進行スルノ前豫シメ我
方向ヲ規正セシ丁ヲ欲シ再ビ土人ト協議セシニ初メ
ノ程ハ我行路ハ正シキ旨ヲ主張シタレ共此時ニシテ
其誤タルニ服セリ而シテ既内ハ殆ト景初我等カ目指
タル方向ニソアリケル此偶然ニ生シタル事實ハ余カ
昨年中土人ハ案内者トシテ誤リナキヲ免カレズ且ツ
アル旅人ハ土人ノ方向ヲ指テ賞揚ストイヘ氏コモ亦
信スルニ足ラズト云ノ説ヲ保證スルニ足レリ
此故ニ我等ハ景初ノ線路ニ戻リ一マイル許澤ヲ横斷

シ方向ヲ南ハ十六度廿五分東ニ轉シ既向ノ下ニ於テ
イクシベツ原ニ入ニ其間回ラガルヲ得ザル最近ノ丘
禁ニ(遠望鏡ヲ以テ推度シ)達セン丁ヲ求メタリ蓋
シ澤ハ低濕ニシテ屢々踏ヲ没スニ至ルト雖氏決テ徒
涉スヘカラサルニ非ス然モ恐ル石炭道ヲ開クニ於テ
甚タシキ障碍トナラシ丁ヲ澤ノ半途ニ於テ人夫ノ内
鐵鍬ノ附タル一丈ノ測量竿ヲ突立タルニ二尺許ノ所
ニサク堅キ所アルノミニテ全竿泥中ニ没入シタリ然
レ氏地面ノ勾配ハ河岸(高サ九尺)ヨリ隔ル三千尺ニ
シテ九リ七尺ナレハ浅キ溝ヲ開通スルニ於テハ容易
ニ水ヲ排除シ得ベシ(河迄掘開ケハ長キヲ要セス)○
如此シテ澤地ノ全部或ハ多分ノ水ヲ除ク時ハ方今河
流ノ左右ニ於ルカ如キ堅キ地トナルベシ恐ラク道路

開石使

ノタメニハ其左右ニ各一ノ良溝ヲ開通スルノミニテ
足リナシハ其北ナル澤地ニ開通セル運河及ヒ平岸
村ニ近キ運河ヲ以テ此一例トナスニ足ベシ
景後ニ採ル線路ハ既ニ説明セル大池ノ北端ヨリ北
ハ九ノ四百尺許ノ所ヲ走レリ此池ハ見ルヘキノ出口
ナク澤地ノ上部ニ位シ一糸ノ樹木ニ依テ圍繞セラレ
水ハ滿々タルモ池畔ノ土地ハ堅シ池ノ形ハ少ク弯曲
シ東西兩畔ハ並行シ相隔ル所ニ百ヤルドニシテ
西ノ方ニ弯曲セリノ斯ク廣潤沖積層ノ平原中ニ如此
ノ湖水アルハ何ノ故タルヤ景初之カ説ヲ為ニシク
苦心セシガコハ昔時石狩水路ノ一部ハニシテ水流ノ
屈曲セル所ニ當リ其流勢ノ劇烈ナルヨリ堀レテ非常
ノ深キニ至レシヨリ洪水ノ節他所ハ泥土ノ沖積ニ依

テ一様ニ埋没セラレ方今ノ平原ヲ成セルモ未ダ池ト
ナリテ茲ニ存在セルモノナルヲ察明セリ
土人ノ曰ク河内其他我カ線路ノ通スヘキノ所ヨリ少シ
ク北ニアル數條ノ小流ハ南ニ流レ其廣潤ナル平原ニ
入茲ニ注口ナキ澤或ハ池ニ終ルト是此地方乾燥ノ地
ニ乏シキ所以ニシテ殊ニ南ニハ近ク「イ」クシベツ河ア
リ西ニハ石狩及ヒ「セ」バイ「ア」リ右ニ「イ」ヘル小流ニハ魚
居レ共鱒「ナルモン、トロート」ナルベシハアラズト云
フ然モ出口ナキ池ノ水ハ塩水ニハアラナルカ如シ
第七月廿七日（昨日）及ヒ今日ハ甚シキ雨天ナルヲ以
テ天幕中ニ舎業ヲナシ報文ヲ記シ少ク作圖ヲ為セル
ノシ〇余カ「タ」ラン「レ」ット「ト」ヲ以テ沖決線ヲ切ル間ニ補
手一名ハ「手」ヲ以テ其高低ヲ測リ他兩人ハ標竿及ビ

用 石 使

第九月三十日ハ天氣依然トシテ甚タ悪ク澤ハ水多キモ余ハ土人二名ヲ率
テ亦候ニ補助手ハ此ニオメテ未タ終ラザルノ舎業ヲ為サシメタリ
余ハ土人ト共ニ丸木舟ニ乗シ石狩河ヲ下ルニ「マイル」「ビバイダツプ」
ノ下第一折ノ所ニ於テ上岸シ「ヘンド」「コンパス」小羅ヲ以テ南七十四度東ニ
向ヒ「イクレベツ」ノ方ヘ丸ソ四「マイル」(一里半)許進行セリ○曉
向太ニ於テ年老タル土人ノ案内者ガ余ニ話リケルハ「ビバイダツプ」
ノ近傍ニ一路アリ此ニ由ルキハ石狩河ヨリ澤地ヲ涉ラスシテ
「イクレベツ」ニ至ルヲ得ベシト余尚ホ此言ヲ信ジ其道ヲ見出サ
ニ「」ヲ期望セシニ水日ノ亦候ニ依テソノ然ラサルヲ明證セリ
蓋シ我輩石狩河ヲ離レ行ク未タ三百「ヤルト」ニ過サ
ルニ既ニ已ニ開濶ナル一澤地ニ出テ其澤ハ「イクレベツ」
ベツ河ヨリ二三「ヤルト」ノ所迄ニ及ビリ我輩
此澤ヲ涉ル半途ニシテ此澤ハ我カ「ビ

セリ○廿五日ハ標杭ヲ建ルコト九二千三百尺、廿六
日ハ二千二百尺(前日ノ線路ヲ改正セル七百尺ヲ
込テ)ナリキ○我カ羅針打探測量ハ勿卒之シヲ以
テ第一建標ニ依テ稍々見分ヲ得ルノ後更ニ此所彼
所ニ再々第二ノ標杭ヲ建ルヲ要シタリ然モ当初ノ
精確測量ニ取モ多ク時間ヲ費シタルナルベシ○廿
七日ハ線路ヲ測定セル二千九百尺、廿八日ハ三千七
百尺(線路ヲ改正スル一千尺及ヒ些少ノ舎業ヲ込
テ)ニシテ我カ管所ノ近傍ニ達シタルヲ以テ往返ニ
時間及ヒ勞力ヲ費ス「」日々ニ減少セリ
第八月廿九日(日曜日)朝天雨ヲ催シタレトモ余
ハ人夫兩名ヲ率テ尚餘脉ヲ掘試ミ未タ十分ニ開カ
ザレ氏此層脉ヨリ開坑ヲ始ムヘキノ適地タルヲ十

月
更

分ニ了解セリ其層ノ厚サハ四尺四寸其質堅クシテ
良ニ其下ニ悉キ骨状石炭九寸アリ又其下ニ淡灰色
コブアヤ、クレール尾ノ粘土ノ厚サ二尺計ノモノアリ蓋
シ練火石ヲ製ス玉ハ日本ニ多カラサルニ付此コブ
イハ大ニ直打アルモノナルベシ但シ此粘土ハ容易
ニ石炭ト共ニ開採スルヲ得ベク且坑ノ入口ニ十分
ノ高サヲ興フベシ○我輩ハ諛所ニ大柱カシゲウエヲ建
テ記号ヲ附シ坑ヲ開クヘキ場所タルヲ示セリ又同
様ナル柱(A)ヲコトシ五七六イニ建タリ是ハ彼岸
同層上ニ開坑スヘキ場所ナリ○鐵道ノ一技線ハ此
兩所ノ近傍ニ及ヘリ
同日午後晴天タルヲ以テ我輩ハ鐵道測量ヲ始メ線
路一千貳百尺ヲ了レリ

○第八月三十日ハ終日曇天ニシテ時々雨ヲ下
スヲ以テ管所ニ籠リ舎業ニ従事セリ○三十一
日ハ天氣ノ模様稍々改良セルヲ以テ午前十一
九百尺ヲ測了セリ然レトモコハ嚮ニ測リシ所
ヲ改メ定メタルニ過ス午中飯及ヒ少舎業ノ
為ニ帰營シ更ニ發セントシテ雨ニ妨ケラレ終
ニ降り暮シタリ○九月一日時々雨アリ管所ニ
止テ少ク舎業ヲ為セリ○二日美晴ヲ以テ三千
一百尺ヲ測定セリ但シ其内五百尺ハ前日測量
ノ改正ナリ三日ハ二千尺ヲ測了シ管所ヲ幌内
太ヨリコトキニシテトニ移シタリ○四日五千
五百尺ヲ測定セリ蓋シ一千七百尺ハ前日測量
セル所ノ改正ニ係レリ○我輩ハ今幌内原ノ錯

雜不規則ナル地勢ヲ離レタルヲ以テ測量スル
所多クハ直線ニシテ是迄ノ如ク百尺毎ニ線路
ヲ曲ルヲ要セサリキ而テ狹隘ナル嶮谷モ亦稀
ナルヲ以テ多分ハ地面平坦ナリキ只稠密セル
森林ヲ伐リ開クニ遲滞アリシノミ

第九月五日（日曜日）強雨ヲ以テ此ニ舎業ノ
後更ニ又一日ノ休業ヲ得タリ○六日朝天雨ノ
催シアリシモ我輩ハ八千七百尺ヲ測定シ得タ
リ蓋シ總テ直線ニシテ地面モ殆ト平坦ナリキ
只「イナキシリ」河ヲ越ルニ於テ特別ノ遲滞アリシ
ノミ○我輩管ニ歸ルニ當リ凡ソ五日前「ト子
ベツ」或ハ尚ホ夫ヨリ東ノ方短路ヲ開クガ
タメ粗畧ノ打探測量ニ赴キタルニ補助手ノ歸

ルニ會セリ○七日彼等ハ我來リシ路ニ向ヒ更
ニ別段ノ測量ヲ為シタリ而テ我輩ハ同日七千
四百尺（少ク屈曲アリ）ヲ測了シ管所ヲ二三
イル「イナキシリ」ノ下流ニ移シタリ○八日朝
間雨甚シク其餘モ甚タ不定ノ天色ナリシヲ以
テ管所ニ止リタリ但シ余ハ「タラシ」ツト「ラ
規正スルノ好機會ヲ得タリ○九日線路ヲ測定
スル六千三百五十尺（半ハ曲線）午後強雨ノ
タメニ管所ニ追ヒ込ラレタリ○十日半ハ弯曲
シテ線路ヲ測ルコト八千二百五十尺ニシテ「ト
子ベツ」ブト「レ」ニ營ヲ移セリ○十一日終日降雨管
ニ在テ勿々舎業ニ從事セリ○十二日（日曜日）
強雨未タ止ズ殆ト尽日皆管所ニ滯留セリ而テ

余ハ此報文章稿ノ一部分ヲ記セリ○十三日七
千尺（半ハ屈曲ス）ヲ測定シ我管所近傍ニ至
テ終レリ○十四日七千尺（好部分ハ屈曲セリ）
ヲ測定シ我管所近傍ニ至テ終レリ○十四日七
千尺（好部分ハ屈曲セリ）ヲ測定シイイクシベ
ツレノ西岸ニ渡リ數マイル下流ニ管所ヲ移セリ
○十五日測定スルノ九百尺（多クハ直線ニシ
テ樹木ヲ伐リ開クノ多カリキ）我管所ニ近接ス
ルニ至テ終レリ○十六日測定スル一萬一千三
百尺（半ハ屈曲セリ）其終レル所ニ管所ヲ移
シタリ○十七十八兩日旺強雨ナリシヲ以テ一
日管所ニ屯セリ然レトモ余ハ少ク野業ヲ為シ
十八日ノ午後雨止ヲ見テ管所近傍ニ就テ少シ

ノ畧測ヲ為シリ○斯ク連日強雨アリシヲ以テ
河水ハ増加シ最モ高度ニ登リタリ○水ハ我輩
カ露管ヲ結ビタル河岸ノ頂上ヨリ二三尺下ニ
達シ實ニ我測量スヘキ低地及ヒ澤地ノ端ハ行
潦多カリキ然レトモ十九日ハ前日畧測ノ差誤
ニ依テ下端ノ一部ヲ兩度往返シ二千六百尺ノ
餘分ナル測量ヲ為セル外ニ愧向太逆ノ残り六
千四百尺（好部分ハ屈曲セリ）合テ九千尺ヲ測
定シ得タリ但シ我輩ハ此事業ヲ九ノ四時ニ終
リ徒渉シテ濡リタル衣服ヲ乾衣ト更ルヤ否ヤ
忽チ丸木舟ニ駕シ石狩ヲ下ルハコトマイル半
（三里半）津石狩ニ達シ黄昏茲ニ野營ヲ張タ
リ蓋シ余ハ間接ニホテ閣下ノ余カ当月府下ニ

歸ルヘキヲ欲スル旨ヲ聞キ雀躍ニ堪ヘス急キ
其用意ヲ為シタルナリ

第九月二十八日箱館ニ於テ記ス

我輩ハ前条ノ記事ニ於テ明瞭ナル如ク實ニ最
初ヨリ匆忙事業ニ從事シ一日モ空フセス天氣
晴朗ナルカ然ラサルモ為スヘキノ舎業アレハ
一週内一日モ休業ヲ許サス通常毎朝七時ニ起
業シ夕六時ニ止業セリ蓋シ我輩カ斯ク努力勉
勵スルハ線路ノ案外ニ延タルト
五里ナラテ
七里即チ四割ノ差ナリ
地勢ノ案外ニ困難ナ
リシト非常ニ雨天勝ナルトニ依テ引起シタル
遅延ヲ稍々補ハシテ希望セルヲ以テナリ
○
我輩札罽ヲ發シテヨリ測量止業迄雨天ニ依テ

野業ヲ廢セハ日數二十日ナリ其内十七日ハ幌

向太ヨリ測量ヲ始メタル後
實ニ幌内ニ達シ

タル後モ一ニシテ地質検査ニモ亦四日餘費シ

タリ然レハ全ク鉄道線測量ニ餘ハ所唯二十九

日ノミナリキ而テ作圖ニモ亦少ナクモ二三

日ヲ費シタルナルヘシ○此鑿道ノ長サハ殆ト東

京横濱間ニ同シ而テ該地ハ開濶ニシテ樹木ナ

シ地勢モ多ク平坦ナリ而テ該所ノ線路ヲ測定

スルニ幾何日ヲ費セシヤ又外人幾何人ヲ用ヒ

シヤ閣下之ヲ亂サハ恐ラク之レヲ知ルヲ得ヘ

シ我輩ハ其事業ニ慣レサルヨリ一日或ハ二日

ヲ耗費セシナラン我補助手ハ此業ニ習ハサル

ノミナラス余ト蛭氏鉄道ヲ測定セシハ之レカ

始メニシテ鉄道建築ニ熟練セル工師ハ其事ニ
熟セルヨリ唯機械の上ニ行フヘキ細件モ余ニ
於テハ携ヘタルニ三ノ書籍ニ就テ些々要領ノ
窺ヒ知り先ツ其所以ヲ講究セサルヲ得サル等
ノ一徃々アリキ蓋シ事業ノ新規ナルヨリ我輩
ニ多クノ樂ヲ与ヘタリ而テ余ハ尚今ニ未タ新
規ナル測量ノ一課ニ於テ少シク實驗ヲ得タル
ハ深ク喜フ所ニシテ年少ノ補助手等ニ於テハ
「網」ニ入ルモノ皆魚ナリモ何等ノ件ヲ學ヒ得ル
リ物ナ然リト虽氏余ハ若シ豫メ此事業ニ於テハ貴價
等ノ為ニ地質的ノ事業ニ要セル期日ヲ全ク
奪ヒ去ラル、ト知ラハ余ハ其本務外ナル事業
ヲ企ルヲ欲サリシナラシ何トナレハ余カ事

業ハ地質的ニ於テ直打多ク且ツ本年巡回ヲ欲
セシ二三ノ場所アリシヲ以テナリ然レトモ連
日ノ雨天ハ畢竟事業進歩ノ大障碍ナリシ也
鉄道線路測量ノ件ニ就テハ（東京ニ於テ余カ
札幌ニ出ルヲ要スル旨ハ聞タレ（曾テ余ニ
協議セラレシトナカリキ（奇ト謂フヘシ）○
札幌到着ノ節余ハ唯劣リタル士官等ニ達シニ
二日ニシテ閣下ハ鑛道測量ヲ准可セリト云フ
ノ電報ヲ示シタリ蓋シ該ノ請フ所ナルヤ余ハ
之ヲ知ラサヤナリ其後数日ニシテ（電線ノ破
損ニ依テ）彼士官ノ内一人口上ヲ以テ余ニ測
量ヲ為スヘキ旨ツ乞ヘリ余ハ後來緊要事件及
ニ緊要ナラサル件ト虽氏直ニ書面ヲ以テ閣下

ヨリ示令アラシク欲スルナリ

鉄道線ハ「クB」号標柱ノ近傍ニ起リ、幌向太迄
長サ九万二千四百二十五尺即チ十七「マイル」
半（凡ソ七里）ナリ而テ別ニ「クA」号標柱迄
九百尺ノ一枚線アリ○線ノ上端一里内外ノ間
ハ此所彼所ニ^{ニツク}鑿填ヲ要スル所アリ其餘ハ多分
甚タ平坦ニシテ狭隘ナル豁澗即チ河流一ヶ所
「イクシベツ」河ニ一百尺許ノ植梁一ツヲ要ス
○地ノ勾配ハ幌向太ノ方へ漸々斜下シ多分ハ
甚々緩徐ニシテ上端最モ峻シキ所（数百尺ノ
間）ハ五十尺ニ付九一尺即チ一「マイル」ニ付
百尺ノ勾配ナリ○鉄道ヲ開キ汽車ヲ備ル等ノ
經費ハ恐ラシク七十万弗ナルヘシ而テ其利子ヲ

開拓使

年一割トスルハ一ヶ年七万弗ニシテ一ヶ年於
万噸ノ産額（良坑ノ出額）ト省做シ一噸ニ付
七十匁ノ税ニ当レリ然レモ若シ汽車ヲ用ヒス
当初馬ヲ用ユルニ於テハ輕便ナル鑛路ニシテ
足ルヘク輸車等ノ價モ從テ減少スルニ付最初
ノ費額ハ二十五万或ハ三十万弗ニ減スヘシ而
テ其一割ノ利子ハ唯ニ万五千或ハ三万弗ニシ
テ即チ於万噸ノ出額ニ付一噸二十五匁或ハ三
十匁ノ税ニ當レリ○石炭坑ヨリ全路下リ坂ナ
ルニ付輕車ヲ造ル片ハ馬二匹ヲ之レニ載セ御
者一名ニシテ五噸ノ石炭（若シ平坦ナラサル所
アラハ）ヲ積タル車ト共ニ之レヲ幌向太マテ
運送シ同馬同御者ニシテ同日ニ二輛ノ空車ヲ

開拓使

率ヲ石炭坑ニ帰ルヲ得ヘシ然ルキハ一噸ノ運賃大約二十弍或ハ二十五弍ニシテ金利ヲ合セ總計五十弍(道路運車ノ修理ハ此限ニ非ス)ニ当ルヘシ故ニ一ヶ年産出ノ額於万噸ナレハ汽車ヨリモ馬ヲ用ル方廉ニシテ一ヶ年二十万噸ナルモ尚ホ馬カノ方汽カヨリ稍廉ナリトス其故ハ汽車ニ要スル所ノ金利七万弗ヲ大数ニテ除スレハ一噸ニ付唯三十五弍トナリ之レニ運送賃一噸ニ付十弍ヲ加フレハ(道路修理等ヲ算入セス)合テ總計四十五弍トナル也然ルニ馬カラ用ユレハ前条述ル如ク金利(一噸十四弍)ノ外ニ每噸二十三弍ノ入費ニシテ即チ總計一噸三十七弍ニ当ルヲ以テ

ナリ然レモ一ヶ年三拾万噸ノ産出ニ上ルトス汽カモ馬カト普シク安廉ニ至ルナリ其故ハ最初建築ニ費ス金額ノ年利ハ唯每噸二十三弍許トナリ之ニ十弍^{運賃}ヲ加フルモ總計一噸ニ付三十三弍ニ過キス馬ヲ用ユルモ利子九弍ノ外ニ二十三弍ヲ加フレハ總計每噸二十二弍ニ当ルヲ以テナリ蓋シ此計算ハ別ニ修理等ノ雜費アルヲ以テ石炭運送ノ全キ費額ト看做スヲ得ス且其計算ハ甚タ粗畧也然レモ一歳ノ産額三十万噸以下ナレハ馬カヲ用ユル最モ安廉ニシテ産額漸ク多ケレハ每噸ニ就テノ経費隨テ(噸数許多ニ至レハ減シ方ニ差異アルモ)減少スルハ之レニ依テ明瞭ナル可シ蓋シ出額甚タ多

用石炭

キモ修理等ノ諸經費ヲ以テ幌内ヨリ幌向太道
石炭運送ノ費用ハ一噸ニ付二十五式或ハ三十
式一タランカ兩三年ノ間ハ比例上ニ於テ産出
少キカ故ニ恐ラク少ナクモ毎噸五十式ニ当ル
ヘシ蓋シ丸木舟或ハ鉄軌トキ馬車路ヲ以テ運
送(札幌ノ或官員ハ此事ヲ考ヘタルガ如シ)ス
ルノ經費ニ比スレハ其廉ナル論ヲ族々サレナ
リ
茅間石炭山ト之ヲ比較スルニ幌内ノ石炭ハ茅
ノ澗ヲ過キサルヲ得サレニ付其水路運送ノ距
離甚タ長遠ナリ是考究スヘキノ一件ニシテ十
分ニ大ナル汽船ハ幌向太ヨリ直ニ石狩河口ニ
石炭ヲ致シ夫ヨリ海路横濱其他ノ港ニ送ルヲ

得ル亦疑ナシト雖幌向太ヨリスルト茅ノ澗ヨリスルト
其距離ノ差異甚ニ時間ノ長短ニ依テ幌内ノ石炭ニハ一
噸ニ付九ノ廿五式ノ増費ヲ生スヘシ之ニ幌内幌向太間錢
路運送ノ賃五十式ヲ加フレハ汽カヲ用ヒス(又或ハ石炭ヲ
積タル車ヲ以テ空車ヲ引上ル手段ニ至レハ)馬カヲモ用ユ
ルコトナク唯ニマイル間ヲ下リ坂ニ由テ運送スヘキ茅ノ澗
石炭ノ運賃ニ對シ幌内石炭ハ一噸ニ付七十五式ノ失費ナ
リ加之石狩河ノ通航ハ一歳四ヶ月ノ間結氷ノ為メニ鎖閉
セラル、ヲ以テ冬間開採セラレタル石炭ハ堆積シテ数月
風雨ニ暴露シ漸ク其良質ヲ失フニ至ル可シ但シ後來煤田
ヨリ石狩河口迄鐵路ヲ開クノ拳アリテ彼ノ沢地ヲ横斷シ
線路ヲ切ルコトヲ得ルニ於テハ距離モ甚タ長延ナラサルニ
至ルヘシ蓋シ今ヲ以テ之ヲ考レハ仮令石狩ノ石炭ハ其質

用石吏

最良ナルモ大ニカブ茅ノ潤ニ用キ其石炭山ヲ開採スルヲ
上策トス或ハ之レカ為ニ汲井ニ短小ナル波戸ヲ築キ人工
ノ畧港ヲ作ルモ其經費ハ幌内ニ鉄道ヲ建築スルヨリ遙ニ
少ナカルヘシ茅ノ潤ノ古^{フルキ}鋪石炭ハ久シク廢業スト虽北
地中現ニ突見セル最上ノ「ケーキング、エール」ニシテ煉鐵
所ニ用ユルニ最モ至当ナリ而テ之レヲ他ノ茅ノ潤石炭ニ
混合セハ良好ノ焦炭ノ多量ヲ製シ得ヘシ且ツ開採ニ意ヲ
注ク丁尚精ナレハ石盤ノ量減少シ隨テ茅ノ潤石炭ノ灰分
ヲ減スヘシ此件ニ付テハ層脈中ニ最良質ノモノアリ又石
炭ニ依リ焦炭トナス前之レヲ碎キ之レヲ洗ヒ有害ナル石
様部分ヲ清淨ニスルヲ得ヘシ亞國ノ石炭坑ノ一所ニ於テ
ハ之ヲ洗クノ經費一噸ニ付唯十五先ト云
然リト虽氏茅ノ潤石炭山ハ石狩河東ノ煤田ニ比スレハ甚

タ小ナリ故ニ當初既ニ開坑セル茅ノ潤煤田ニ業ヲ起シ産出ノ額十分
トナリ利益ヲ見ル間ニ幌内ニモ開坑ヲ始メハ仮令運送ノ為ニ餘分ノ
經費アルモ不絶石炭ノ需用増加スルヲ以テ茅ノ潤ノ缺ヲ補フヘク又其
質ノ最良ナルヨリ利益ヲ得ルナルヘシ
鉄道ノ線路ハ数年ヲ出スレテ汽車ヲ用エルヲアランヲ期シ火輪車
ニ相當ナルカ如ク弯曲シテ線路ヲ設クタリ蓋豫メ之ヲ為スノ慮
ナルニ依レリ然レモ馬カヲ以テ石炭車ヲ牽シムルニ至テハ
丘麓ヲ回り或ハ澤地ノ外端又ハ河流ノ屈折ニ沿フ等ノ所ニ於
テ銳キ曲線ヲ作ルヲ得ヘキニ付大ニ鉄道建築ノ費ニ就テ
減少スル所アルヘシ○馬徑或ハ車路ノ為ナランニハ其線路モ亦
大ニ異ナレリ此等ノ路ニ於テハ石炭山ヨリ恒ニ下リ坂ナル線
路ヲ兩三所ニ於テ轉シテ稍登リトナシ尚短近ナル線路ヲ作
ルヘシ又他所ニ於テハ仮令其距離ハ減スルモ其勾配ヲ作

用石使

ルノ入費馬車等ニハ相当セサル所モアルヘシ然レモ車道
鉄道トハ大同小異ニシテ其線路相去ル遠クラス到底高畠
氏ノ切リタル線路ヨリモ短少ナリ而テ車路家上ナル線路ハ
我鉄道線路ニ付作ル所ノ箇上ニ容易スク圖畫スルヲ得ル
コ亦疑フ容レス

第九月二十日補助手五名ハ水満々タル豊平川ニ依テ直テ
ニ札幌ニ赴ケリ而テ余ハ石狩太迄傍ノ「オヤフル」及ヒ
「ウツナイ」英ニ花畔^{パンナゴ}ニ於ル鑛ヲ見分スルカ為メニ
會計官ト共ニ人夫二人土人ノ舟子二人ヲ率テ石狩河ヲ
下レリ○我輩カ旅具從僕等ハ札幌太迄我等ト同行シ夫
ヨリ分レテ篠路ヲ上リ同村ニ於テ我輩ノ歸来ヲ待テ又
リ○石狩河ヲ下ル途上余ハ其津石狩ヨリ札幌太ノ間迄二
年来兩岸ニ人煙ノ増加シ繁昌ナル景況ヲ見ハシタルニ實驚歎ヤ

バイダツプ^レ近傍測量ノ際涉リタル澤ノ一部分ニシキ
南北ニ延ビ幌向太ニ於テ見タル閑濶ナル澤地ニ迄蔓
延セルカ如シ○我輩此澤ヲ涉ルノ際ニ箇ノ大池ヲ見
タリ皆河流ニ接近ス然レトモ之ヲ避ルガ為メニ遠ク
屈曲スル一ナカリキ池ノ水ハ殖物質ノ物ヲ含ムト多
量ナルヲ以テ飲ヲ得サリキ○澤ハ中央ニ近ツクニ隨
ヒ地漸ク高ク漸ク堅クシテ雜草低ク歩行大ニ易キヲ
覺ヘタリ然レトモ「インシベツ」方面至テハ水多ク草木
漸ク高ク行步甚ダ困難ナリキ○「ビバイグト」ヨリ幌内
或ハ「イナキシリ」ニ至ル直線ノ「インシベツ」端ニ沿ヒ北
東ノ方ハ小樹繁生セル低濕ノ澤地ニシテ「インシベツ」
河ノ屈曲セルニ依テ甚タ長延セルカ如シ蓋シ之ニ依
テ數「マイル」ノ間線路ハ「インシベツ」ト殆ト並行スルニ

至レリ○九ツ正午ニ及テ我等ハ終ニ「イクシベツ」ニ達
シタリ（余ハ甚ク疲勞セリ）蓋シ土人ハ「イクシベツ」ハ我
カ前途ニアリテ遠カラズトノ説ヲ交シテ信用セザリ
シカバ大ニ驚愕ノ様ニナリキ彼等ノ云ク総テ「澤地
ハ河内」ハ「ツバオマナイ」ノ近傍ノ河水ニ浸濕セラレ
者ニシテ此河ハ河流或ハ湖地ニ流レ入ラズ其北端ニ
於テ此澤地ニ注入スルナリト
以巨大ナル澤地ハ（土人云石狩河ノ西岸モ同様ナリト）
余ハ殆クテ之ヲ見タルナリ其故ハ余ハ是迄毎ニ河流
ヲ飛シ陸ハ「イクシベツ」西岸及ヒ幌向近傍ノミニシテ
此地方ハ割合ニ澤少ク堅キ平地多クワリテ以テナリ
余ハ札幌ノ出ル近曾テ見聞セル所ニ據ルニ幌向太ヨ
リ幌内近傍ノ丘岡近ハ直線ニ鐵路ヲ開キ得ベシト臆

度セリ故ニ茲ニ至テ豫メ期シタルヨリ里数大ニ定ビ
タルノミナラズ思シキ澤地ヲ避ルモノニ不得止線
路ヲ屈曲セルニ依テ益々長遠ヲ極ルニ至レリ而テ
我測量ノ時間モ澤地ノ外形ヲ検査シ地勢ヲ見分シ免
テ直接短途ニ線路ヲ切クシメニ意外ニ遅延セリ
七月中札幌ヨリ呈セル余カ報文中ニ述タル石狩平原
樹木ノ多寡及ビ之ヲ鋸断スヘキ木挽車ノ負數等ハ以
澤地ノタメニ大ニ変革ヲ蒙ラサルヲ得ザルニ至レリ
其故ハ六百方ヤイルナル大原殆ト全ク樹木ヲ以テ蔽
レタリト臆度セシニ樹木ハ時ニ九三百ヤイルノ幅ヲ
以テ河ノ兩岸ニ並立スルノミナレハ之ノ平原ハ蓋シキ
上流ニ多シトスルモ良材ヲ有スル地ハ余カ算勘セシ
六百方ヤイルノ十分一ニ過ザルベシ且卑濕ナル地方

ニ生ル材ハ其質悪ク實ニ北地ノ材ハ内地ニ及ハサル
者ヲ聞ケリ故ニ北海道ノ材利ハ我期望セシ所ヨリ
モ甚タ望マタリトス然リトモ虽モ札幌ニアルガ如キ水
挽器拔敷座ハ數年ノ間其業ヲ為ニ充ルノ材アルト疑
ヒナシ殊ニ其材ヲ擇マザルニ於テハ益許多ナリトス
樹木ヲ伐拂ヒ耕地トナスハキ沃地ノ數モ余カ恒ニ臆
度セシ所ヨリ減少セザルヲ得ニ蓋シ開闢ナル澤地ハ
素ヨリ伐木ヲ要セザルニ付力ハ大ニ之ヲ省減スヘ
シト雖モ方今ノ形状ニテハ甚タ瘠地ノ如シ然レモ此
澤地ハ溝渠ヲ開通スルニ依テ良好ナル耕地ト為ス可
ラズトハ之ヲ信スル能ハズ(確乎實驗ノ證ナシトイハ
ル)如何トナレハ水流ノ在ル所ハ必ず小流ナルモ其岸
ヨリ若干距離ノ間ハ地面堅クシテ雜草野麻或ハ蕨

類繁茂スレハナリ澤地ノ水準ハ大河ヨリモ高ク(十二
尺餘)而テ河流ハ遠カラズ且ツ地面ハ自ハイブトニ於
テ高低ヲ測ルニ(河岸ヨリ澤ノ中央ニ向テ急ニ)上ル
一ナ尺ニシテ二尺)上ルニ依テ此水ヲ拂フハ甚タ難事
ニハアラザルベシ是レ開拓使ノ將ニ試驗シテ可ナル
ハキノ業ナリ
我輩、イクレバツニ於テ午飯ヲ喫シ少時憩息ノ後殆ト
前路ニ寄り石狩河岸ニ歸リ蓋シ少ク澤地ヲ避ケ、イク
シバツレ河ニ近寄近頃高島氏カ幌向太ヨリ幌内迄ノ通
路トシテ測定シ標杭ヲ定タル線路ニ由リ小車路間之
ヲ歩行セリ是我輩カ始テ茲ニ看出セシ線路ニシテ數
百ヤルドノ間粗畧ニ之ヲ測量ヤリ但シ札幌ニ於テハ
如以線路ヲ切開キ之ヲ測量セシ(恐ラク因モアラン)ト

開拓使

ヲ余ニ告ル、有益ナルヲ思ヒ起セシ者一人モ
キ蓋シ開手ノ際此等総テノ事實ヲ余ニ告知セハ我カ
事業ニ於テ裨益アルベキハ勿論ノ一ナルヘキナリ
我輩ハ大ニ疲勞シテ午後晚ク再ヒ「ビバイ」ト云
ニ達シタルニ我カ連中ハ只今土人ノ持来レリト云
或ハ茶褐色ノ大鹿皮ヲ見ツ「アリキ」我輩遂上「ビバ
イ」ガツ「フ」ヲ過ルニ雪リ狹隘ナル低キ頸地ヲ出水ノ横
切リ流ル、ヲ見タリ
前ニ「イ」ヘル廣闊ナル澤地ニ至當ナル水排ケヲ造ルニ
於テ甚タ巨大ナル金額ヲ費スニ非ザレバ「ビバイ」ト
ヨリ愧内ニ鐵路ヲ開ク「一」能ハザル殆ド明瞭ナルニ以
タリ蓋シ愧内ノ太ヨリノ線路ニ比シテハ里程一里ヲ減
スヘシト雖ハ其經費ハ其利得ニ過タリ況ヤ川ヲ航

ル十三「マイル」(五里ニ分五厘ナリ)ノ増加ナルニ於テ
ヤ余ハ確證スヘキ大尉「デイ」氏ノ圖ヲ尋持セスト雖ハ
土人ノ云フ所ニ依レハ「エ」ツ「ブ」イ「込」傍ニ於テ少距離
ノ間石將河底ヲ深クスルキハ大船ハ「ビバイ」トヨリ
モ愧内太ニ寄り易カルベシ愧内太ヨリ上流ハ河底漸
ク浅シ大船ヲ「ビバイ」ニ上スガ如ク長距離ノ間河底ヲ
深ヒ之ヲ深クスルハ恐ラク行ハレ難カラシム○愧内太
ニ就テ愧内ノ真位ヲ測定スルニハ高畠氏カ既ニ切開
キテ標杭ヲ建タル線路ハ大ナル助ケヲ與ヘタリ
翌朝(第七月三十一日)我輩ハ丸木舟ニ乗シ愧内太ニ向
ヒ正午少シ前ニ同所ニ達シタリ依テ我輩ハ午後検査
ノ夕ノ高畠氏ノ線路測量ニ着手シタリ然リ而テ其線
路ハ既ニ善良ニ之ヲ開キ標杭ヲ建タレハ夜ニ入ラザ

月 石 史

ル前一、マイル餘ヲ容易ニ測定シ得タリ而シテ天氣ハ
終ニ快晴シタルヲ以テ日々以線路ヲ追テ測量セシ然
レハ九六マイルヲ進メル後我輩ハ、イッレバツ河ノ右
西岸ナル高畠氏ノ線路ヲ離レ彼岸水流ノ大ニ曲折セ
ル所ヲ横断シテ線路ヲ切タリ蓋シ其形状ハ余ク昨年
又一昨年、見取図ニ依テ發見セラル所ハ我輩ハ時々營
所ヲ移シ幌内太連四回ニ及ハリ而テ我輩ハ上部ノ煤
地ニ達セシハ實ニ第八月七日ノ午後ニシテ幌向太ヲ
發シテヨリ正ニ一周日其測量セル線路ノ長サハ合テ
二十、マイル七分(八里十三町)日々ノ數左ノ如シ第七月
三十一日五千九百十二尺第八月一日貳万壹千五百八
十七尺同日走方七千七百六十尺三日五千〇六十
六尺同日貳万四千五百五十九尺同日壹万四千

四十七尺同日六日壹万三千六百九十七尺同日七
千六百六十五尺各テ拾万の八千三百九十四尺一日平
均九三、マイル(一里ト五分、一)ナリ(高畠氏ノ線路ハ同
所迄八里ト四分一ナリト云フ)我輩ハ測量ノ外營所ヲ
一二回轉移シ及ヒ作図ノタメニ少時間ヲ費シタリ但
シ作図ハ雨天ニ非サルヨリ、多分後ニ回シタルヲ以
テ當時青天ニ遇モ鐵道ノ線路ヲ經畫シ地面ニ杭ヲ建
ル前之ヲ為サルヲ得サルニ至レリ
是ヲ以テ八月八九兩日ハ我輩一同舎業ニ繫劇ナリキ
○測量ノ時間補助手ニ内二名ハ量地鏈又時ニ標竿
ニ從事シ他ノ一名ハ手準ヲ採テ我輩ニ隨行セリ蓋シ
余カ目論見ハ鐵道ノ線路ヲ切タル後彼ヲシテ其路上
ヲ行カシメ吾等カ所持セル最良ノ器械ナル、タランシト

レウエルヲ以テ精細ニ其高低ヲ測定セシメテ
シタリキ他ノ兩名ハ三稜鏡針及ヒ歩度ヲ以テ我々本
線ヨリ左右澤地ノ邊緣或ハ本流ノ兩岸又ハ高地ノ端
ニ沿ヒ短少ナル枝線ニ切リタリ殊ニ幌内ニ於テハ鐵
道線路ヲ無用ニ長メズ又勾配ヲ作ルニ非常ノ費アラ
ザルタノ其地形ヲ十分ニ調査スルニ依テ大ニ此等ノ
事業ヲ要セリ實ニ此河畔ハ余々林間ノ小徑ヲ徘徊シ
望時ノ見分ヲ以テ推量セシテ及シ仮令線路ヲ多ク
屈曲シ河流ニ沿タル狹隘タル平地工ニ開カントスル
モ往々如此平地ナキ可アルヲ以テ到底一線ヲモ開ク
コト難ハサルヲ證セリ

第八月廿一日 函館ニ於テ記ス

第八月八日 日曜日 全ク舎業ニ消日シ翌九月モ亦然

ナリキ○十日ハ滿天雲ニ蔽ワレ將ニ雨ヲ下サントス
ルノ勢トシテ補助手ノタメニ舎業ヲ整頓セルノ後
余ハ人夫ヲ率テ幌内煤地ニ至リ少ク試堀ヲ為タリ蓋
シ余ヤ實地ニアリ少ク有益ナル地質的ノ業ニ從事シ
實際ニ石炭坑ヲ開クニ當リ將ニ何レヨリ着手スハキ
ヤノ場乎ヲ確指セザルベカク是レ一大緊要ノ事務
ナリ○我輩ハ少時注意シテ調査セルノ後(モンロー氏
ノ北海道石炭分折報文ヲ呈セル余々書中ニ)「L六〇
ニカ」及ヒ「L六〇ニハ」ト記セルニ石炭脈ハ同一ニシテ
全ク一層ナルヘキヲ發見セリ故ニ之ヲ平均スルニ「L
六〇ニカ」ニ期タルカ如キ厚層ニハアラザルカ如シ「L
六〇ニア」ノ石炭ハ二年前ニ於ルヨリ之カ厚薄ヲ量ル
ニ容易ナルカ如ク掘開カレタリ而テ其厚サハ單テ推

月 石 史

量セル可ヨリ稍薄ク凡ソ四尺二寸ノ厚サナルヲ證セ
ノ故ニ其厚サニ就テモ亦其他ノ事ニ於ルモ最モ河ニ
近クシテ且地質の上ヨリ云ハ最モ表面ニシテ開採
ニ堪ル「L」五七六一ノ炭層ヲ置尚上流ニ開坑ヲ始メ
ハキノ目途アルナレ談可ニ於ル旧坑ハ方今上部ヨ
リ崩レ入りタル土ノタメ石炭ハ蔽レタリト雖モ再ヒ
之ヲ開クハ難キニ非ス且横坑ヲ以テ實際ニ開採ヲ始
ルニハ最モ好可ナルベシ蓋シテ横坑ハ北東ニ向ヒ丘
腹ニ入時ハ忽チ水面上良好石炭ノ好部余ヲ開クニ至
ルベシ
河ノ彼岸談可ニ對スル可ニモ亦一ノ横坑ヲ南西ニ開
テ開クコト得ベシ然レ共丘岡低ク以テ二三「百」ヤル
ト以内ナル（本流ノ）他ノ枝川ニ達スル迄ハ水面上ニ於

テ多クノ石炭ヲ開採シ得ヘカラス蓋シ其量ヤ少ク其
質セ劣レ（露）面ニ近キヲ以テ後來ハ水面下ニ至ル
時吸筒ヲ用ヒザルガ為ニ談可ヲ水抜トナスニ至ル迄
ハ之ヲ捨置モ可ナラン故ニ我輩ハ支川ノ南西岸アル
同層ノ石炭ヲ見合セリ蓋シ二年前ハ此石炭ノ露出ヲ
見サリシニ方今ハ河底ニ現然ニ發露シ其厚キト良質
ナルトヲ明示セリ依テ我輩ハ渴望以テ河岸ヲ掘シモ
ソ陽我々帰營ヲ促ス迄成効ヲ見サリキ
余ハ此地方ニ來レルノ幸便ヲ以テ「ノ」ツ「バ」オ「マ」ナ「イ」
離九ノ一里ノ石炭ヲ一覽セントシ之カ用意ヲ為シ蓋
シ昨年余々補助等ハ此石炭地ノ岡ヲ作リタレ夫其
石炭層ノ厚薄及ビ傾斜ニ至テハ其特別ニ困難ナル摸
樣アルニ依リ多ク疑ヲ存シタリ）又夫ハ再ヒ坑ヲ開ク

開採

タノ余ニ先ツツテ發シタリ

第八月十一日ハ朝来雨降り又終日雨ヲ催シタルヲ以テ
テ舎業ニ従事セリ十二日モ朝ヨリ雨兆アリシヲ以テ
舎業ヲ為セシニ午後ニ里ルモ雨ハ降ヤリキ蓋ニ我營
所ハ鐵路ノ殆ルヘキ石炭場所ヨリ一里モ遠隔セルヲ
以テ忽テニ歸ラサルヲ得サルヤモ計リ難キ天氣ニ遠
ク行クハ其甲斐ナク且ツ未タ急ニ入用ナル舎業多ク
ノレヲ以テ行ヲ止メタリ○第八月十三日ハ強雨ナリ
依テ舎業ニ日子ヲ消シタリ十四日モ雨降ルハ屢ナル
ヲ以テ余ハ舎業ニ従事セリ然レモ補助手二三名ハ近
傍ニ於テ須要ナル測量ヲ少シク為サントシテ雨ニ逢ク
リ

第八月十五日(日曜日)天色赤ク疑シキモ快晴ニ向ヒケ

レハ余ハ補助手一名ト人夫幾何ヲ率テノツバオマナ
イノ石炭地ニ赴キ自他ノ補助手ヲ留テ匆忙舎業ニ従
事セリ○我輩ハ地ヲ掘リ少ク困難セル後巡見セル計
石炭ノ厚サ先ニ傾斜等満足ニ之ヲ知ルトヲ得タリ余
ハ曾テ幌内ニ代テ此地方ニ鐵路ヲ引来テ茲ニ起業ス
ルヲ良ナリト思ヒシガ本日ニ検査ニ依テソノ然ラザ
ルヲ明カニ證シタリ故石炭層ハ其褶起互ニ密近セル
ト傾斜ノ不分明ナルトニ其真形ヨリ厚キカ如ク見ハ
タルナレ共到底其厚サニ於テハ幌内ト甲乙アルナ
ク其層脈モ亦同一ナルニ似タリ然レ共ソノフバヤナ
イニ於テハ傾斜甚ク峻ナルニ付幌内ヨリモ之ヲ採採
スルニ不利ナリ

第八月十六日朝間少ク舎業ヲ為シ終レハ、後歲

路ニ着手スルヲノ幌内石炭場ニ赴キ最初人夫
丹ヒ石炭ヲ掘開カシメタリ○人夫ノ内昨日河中ノ路
面ニ就テ坑ヲ掘リ河岸ノ方ニ當テ明カニ其端ヲ頭シ
鋭ク切斷セラレタル缺呀ハ歴々之ヲ見テ得ルニ至レ
リ前日河岸ニ於テ其脈ヲ看出セントレテ能ハサリシ
ハ蓋シ以理ニ依レルナリ而テ之ニ接續スヘキ層脈ハ
何レニアルヤ方今全ク之ヲ知ニ由ナントテハ其缺
呀ノ重立タル脈ハ北ニ向テ其方向ヲ追テ諸呀
ニ就テ掘クレバ之ヲ見テ得サリキ○石炭ヲ調査シ地
面ヲ掘試ル等ニ依テ鐵道線路ノ測定ハ中絶セルニ付
再々嘗テ歸ルノ前測量ハ只手殆クニ過サリキ然レ
氏前年畧測(以測量圖ニ依テ線路ヲ概畫セルナリ)ノ案
要ナル錯誤ヲ看出スルニハ十分ノ事業ナリキ

第八月十七日石炭試掘ト鐵道測定トニツナカラズ
行ヒタレバ他人ノ事業ヲ中絶セル事ナリ依テ不出
来ナリキ我輩カ石炭調査ニ使役スル最良ノ人夫ハ談
業ニ甚タ習ハザルヲ以テ親シク之ヲ監督スルモ其勞力
ノ好部分ハ之ヲ失セリ況ンヤ之ヲ監督セザルノ時
ニ於テヲヤコ、ヲ以テ本日口炭層ヲ見出し得ズ只林
間凹凸タル地上ニ數百尺ノ間鐵路ノ弯曲セル線路ヲ
測定シ標杭ヲ建タルノミ

第八月十八日丹ヒ雨天ナルヲ以テ余ハ終日舎業ニ從
事セリ但シ天色ホト到底雨ハ降ラサリキ
第八月十九日弯曲セル鐵道線ニ標杭ヲ建ルニ數百尺試掘ヲ為ス幾
何然モ前日ノ如ク不出来ナリキ○二十日モ亦雨天ニシテ夜来
強雨ノ後天色赤ク惡シキヲ以テ一同舎業ニ從事セリ而テ廿一日

モ同様ナリキ○二十日モ天色依然トシテ雨兆アリ殊ニ我々雨先
生ナル一老土人ノトスル呼吉ナラズ加之當日ハ日曜日ニシテ舎業ニ急
キノ物ハ成効セルヲ以テ少ク舎業ニ従事セル後終ニ一同一日ノ休暇ヲ得タリ
第八月廿三日ハ石炭層探索ノ外ニ餘分ノ打探測量ヲ為シ鐵道
ノ線路ヲ標スル數百尺ニ及ヘリ○前ニイヘル呼ノ重立タル脈
ハ他ノ價ナキ一ノ上層ヨリ出ルヲ證シ訣呼ノ一端ハ最初ニ考
ヘタルト及對セル方向ニアルヲ示シタリ依テ終ニ斷層ヲ南岸
ニ探リ得タリ然モ之ヲ十分ニ開クナリキ○二十四日モ之ヲ掘タレトモ余カ不在ヲ以テ未タ十分
ニ開キ得ワリキ蓋シ鐵道ノ線路ハ石炭試掘ニ依テ障阻セラレ
且地面ノ甚タ惡キト樹木稠密ニシテ多ク代除ヲ要スルトニ由
リ大ニ困難ナリシモ終ニ石炭坑ノ近傍ヲ得レ一子五百尺ノ遠
キニ及ボセリ○量地健夫、卒夫及ヒ拙人ハ此新シキ事業ニ稍慣習

リ蓋シ此地方ハ二年前迄ハ殆ト無人ノ境ノ如クナリ
キ然ルニ今ハ甚タ大ナル茅屋數アリテ人民ハ方
ニ鮭漁ノ期ノ迫リタルカ故ニ勿々之レカ準備ヲ為シ
居タリ○大舟及漁網多クアリタリ蓋シ津石狩ヨリ上
流ハ如吹澳家ハアラス
我輩ハ干中頃石狩太ヨリ一里上流ニシテ其北岸ナル
「オヤフル村」ノ上端ニ達シ茲ニ上陸セシニ鉄鑛ハ近辺
ニアリタリ○鉄鑛ハ地上ニアリ又所トシテ地下一尺
ノ深サニ及フト云フ而テ長サ凡ソ半里ナル開墾地ヲ
通シ河岸ヨリ林間迄恐ラク百五十「エ」カルノ間ニ直
徑數「ヤルト」ノ小帯脈ヲナシ諸所ニ散在セリ○此全地
面ヲ通知セル甚タ才氣アル住民ノ等計スル所ニ依レ
ハ余ハ長ク測量スルニ非サレハ彼レカ如ク地方ノ模

様ヲ知ル能ハス(一)塊鍊鑛ハ安全地面ノ十分一即チ拾五
[エ]ーカル(一)万八千坪ヲ蔽ヘリト云蓋シ安積リニハア
ラナルカ如シ○鑛層ノ厚サハ一様ナラス最モ厚キ所
凡ソ一尺半ナリ鑛ハ脆クシテ孔多キヲ以テ立方尺ニ
付其目方ハ比例ニ於テ少ナシ恐ラク百斤ナルヘシ鉄
鑛十五[エ]ーカル平均ノ厚サヲ一尺ノ三分一即チ厚サ
一尺ノ所ニ[エ]ーカルトスルキハ鉄鑛ノ全量ハ凡ソ一
万一千噸ナルヘク多キモ二万噸ニ過ヤサルヘシ蓋シ
其量ヤ如キ少ナシ之ヲ溶解スルカ為ニ特別ニ溶解炉
ヲ取建ル程ノ者ニ非ス然レモ若シ石狩ノ石炭ヲ以テ
他ノ鑛物ヲ溶解スルカ為ニ溶解炉ヲ取建ルトアラハ
[オ]ヤフルノ如キ容易ニ得ラルヘキ鉄鑛ハ(若シ其隣ノ
アルカ為ニ他ノ鑛ト混合スルニ惡シカラズハ)之ヲ採

開採

集スルモ可チラシ其量ノ如キハ樹木ヲ伐リ除クニ依
テ或ハ尚稍々多キヲ證スルニ至ルモ計ルヘカラス燐
ノ質及量ノ如キハ前条ニ記載セル平岸村ノ鑛ト殆ト
同一ナルヘシ蓋シ[オ]ヤフルハ方今澤地ニアラスト虽
モ其因テ生スル原根ハ同シカルヘク其質ハ甚々相似
タリ
我輩ハ[オ]ヤフルヨリ石狩ノ渺漫タル水流ヲ溯リ徐々
上流ニ上ル一里南岸ノ[ウ]ツアイニ達シ稍々遲延ノ
後我上陸セル近傍ニ鍊鑛地ノアルヲ発見シタリ然レ
モコハ澤中ニアリテ折シモ水深ク仮令之ヲ渉ルモ水
中ニアリテ見ルヲ得サルヲ證セリ蓋シ住民ノ云フ
所ニ依ルニ其量甚々少ナク花畔ノ上端ニ於ケルヨリ
モ少ナク而シテ花畔ハ[オ]ヤフルヨリモ少ナシト以テ

開採

其量ノ見ルニ足ラサルヲ知ルヘシ但シ其鑛層ハ廣キ
モ直徑ニ「ヤルト」許ニシテ長サ九四十「ヤルト」許ノ域内
ニ在リト云フ蓋シ其鑛地ハ石狩太ヨリ一里半篠路ヨ
リ二里ナリト云フ而テ兩所間ノ道路ニ甚タ接近セリ
我輩同所ヨリ(同途上ナル篠路ヨリ三「マイル」即チ一里
八町ナル)花畔ノ上端ニ歩行シ一園中ニ就テ直徑一二
「ヤルト」ナル二三ノ鑛層ヲ見タリ蓋シ拳大以下ノ鑛塊
數箇其園中ノ地上ニ露出セル所アリ而テ之ニ密通セ
ル家屋ノ裏手ニ直徑四五「ヤルト」許ナル一層アリ一所
ニ就テ之ヲ發キ見ルニ一塊ノ徑八寸ナルヲ證セリ夫
ヨリ又篠路ノ方ハ二百「ヤルト」許ニシテ路傍二十「ヤル
ト」許ノ間ニ長サ一尺半ナル塊アリ又數百「ヤルト」隔リ
石狩ノ河岸ニハ尙多シト云フ又花畔ヨリ篠路ノ方ハ

一「マイル」ノ四分三許ニシテ新道ノ起頭ニ九十「ヤルト」
許ノ間長サ數尺迄ノ鉄塊アリ其外貌及質ハ「オヤフル」
及ヒ平岸村ノ鑛ト同一ナルニ似タリト云フ其量ニ至
テハ遙ニ少ナク調査スルノ價ナシ
我輩ハ徒歩ニテ篠路ニ向ヒ第四時半同所ニ達シタリ
○余ハ右ニ去ヘル新道ヲ一覽シ最モ交通ヲ要スル良
ニ於テ本使ノ斯ク開國ニ努力カスルヲ賞美シタリシニ
數百「ヤルト」ニシテ忽然其新道ハ斷絶セリ恐ラク樹木
ハ澤地ヲ通貫セル道路ノ左右ヲ防クニ足ルモノト過
信セルナリ木ハ數年ノ内ニ腐朽スルヲ免カレサルハ
シ○花畔ヲ一端ヨリ他端迄往過シ余ハ其住民ヲ曾テ
二年前「セ」子ラル、ケアロシト共ニ巡見セシ以未大ニ繁
榮ノ兆ヲ見ハシタリ今回ハ我輩可ナリニ美服セル男

女及子供ニ逢ヒ又小店及行商ヲ多ク見タリ蓋シ其土
産ニ依テ唯生命ヲ保存スルノミナラス尚羸餘アルニ
似タリ小兒ハ善ク肥ハ本リテ喜色アリキ
余ハ篠路ニ於テ空シ余カ馬ヲ待ツテ始ト一時間(余
カ為ニ石狩ニ送リタルヲ又呼返セルニ)ニシテ漸ク二
三ノ駄馬ヲ得テ荷物ヲ送リ出セル後余ハ再ヒ徒歩ニ
テ三里半ナル札幌ニ向ヒ八時頃同所ニ達シタリ残り
ノ荷物ニ附添タル人々ハ余カ着後一時間餘ニシテ到
着セリ是日余カ旅行セル全距離ハ三十六「マイル」(十四
里半)ニシテ其内二十「マイル」半(九里)ハ舟行ニシテ十三
「マイル」半ハ步行ナリキ
空知方面ノ測量ニ従事セル五名ノ補助手ハ近頃余ヨ
リ送リタル命令ニ従ヒ余カ着ノ前夜札幌ニ着シタリ

彼等ハ「エ」ニ達シ空知石炭地ハ一二里手前迄測量セ
ルニ途上各處ニ於テ石炭ヲ看出シ或所ニ於テハ厚サ
六尺ニ至ルモノアリト實ニ幌内ヨリ空知ニ至ル迄全
地煤田ノ連續セルヲ證スルニ至レリ彼等ハ天氣ノ雨
勝ナルト屢々疾病ニ罹ル者アリシトニ依テ大ニ事業
ヲ阻滯セラレタリ
第九月二十一日余ハ昨年夏中小樽ヨリ札幌ニ移サレ
タル鑿井器械ノ小目錄ヲ作ラント欲シタルニ其掛リ
ノ士官ハ札幌ニ居合セザリキ余ハ亦本使ノ土藏内ニ
二箇ノ小箱ヲ見タリ恐ラク(昨春ノ余カ目錄中ニ記セ
ル如ク)ニケ年前預ケタルソルウエーインク、レウエ
及ヒ試験葉ナルハシ又全ク紛失シタリト思ヘル昨年
採集ノ礦石類四包ヲも見出シタリ

午中我輩ハ箱館ニ向テ発シ同日午歳(二十四マイル)即
九里ト四分三ニ達シタリ○翌日(九月廿二日)小雨タレ
瓦騎馬白老(三十一マイル)即テ十二里半ニ至リ十三
日ハ好晴新室蘭(三十マイル)即テ十二里ニ達シタリ○此
等ノ地方ハ比例ニ於テ荒漠タル「ボ」ハ平原ニシ
テ旅行甚々面白カラス蓋シ此「ボ」ハ樽前火山ノ
時々砂煙ヲ下スノ間ハ常ニ依然トシテ地上ニ堆積ス
ルナルバ○新室蘭ヲ札幌ノ海關トナスノ意見ハ大
ニ誤レルニ似タリ其港タル素ヨリ美良ナリト虽モ其
本廳(方今恐ラク人口一千五百ノ一村落ニシテ恐ラク
人口多キ都會トナルハモ地ニアラサルカ如シト隔絶
スルト八十五マイルニシテ其間ハ殆ト無人ノ境ニシ
テ住スハキノ地ニ非ラス

小樽ハ永ク本廳ノ海關タルヘキノ位置ヲ占ノ易キカ
知シト虽モ鉄道ヲ設クルニアラサレハ右待平原ノ出
口(即テ後未札幌ノ海關)タル真位ヲ占ル能ハス而テ鉄
道ヲ開クニハ小樽ニ接シタル地方九マイルノ間ハ甚
々困難ニシテ茲ニ鉄道ヲ貫クノ經費ハ右待河口ニ入
エノ最上ナル入口ヲ造リ之ヲ保存スルノ入費ヨリモ
多カルヘシ故ニ右待コソ船舶輻湊ノ大港トナルヘキ
人
渡シノ小汽船ハ損所アリテ森村ニ航セサルヲ以テ我
輩ハ小和船ヲ雇ヒ速ニ荷物ヲ積込マシメ微吹ノ向ヒ
風定マラハ忽チ我等ヲ呼起シ出帆スハキ旨ヲ屢々約
束シテ枕ニ就キタリ○翌朝(九月廿四日)四時頃余睡覺
テ戶外ヲ窺フニ天晴レ風止ミタリ○客舎ノ者共ハ狼

狽シ稍アツテ一人余カ為ニ舟子ヲ呼ヒニ出テタリ然
ルニ半時餘ニモ及ヒケレハ余ハ木履ヲ借用シ寢衣ノ
マ、一人ヲ供シテ走リ出テ半マイル許隔リタレ上陸
場ニ於テ船頭ノ方サニ舩ヨリ這出逢ヒタリ而テ一應
ノ陳謝モセス速ニ解纜スルヲ約シタリ其時正ニ五時
ナルハシ我輩ハ衣服ヲ更ヘ少シク残りタル荷物ヲ舩
ニ積込ニ第六時ニ海ニ出テタリ○其事實ハ會計官ノ
其職務ニ適セサルヨリ余ハ旅中常ニ我連ヲ拉行セサ
ルヲ得サリシノ一例トシテ記載セルナリ余カ方今ノ
會計官ノ如キ温良ニシテ貴重ナルハキ人ニ孰テハ最
モ言ヒ難キヲノ如シト虽モ其事實ニ於テ同氏ノ
身上ニ對シ關係アルニ非ス其故ハ同氏ハ他ノ職務恐
ラク或ハ尚緊要ナル事務ニ於テハ最モ能ク適當スハ

キヲ以テナリ然レモ亦同氏ノ名ノ為メ或ハ當春本使
ノ利益ニ顧慮セス奇異ニモ能ク其職ニ應シタル人ニ
代ルニ其人ハ余ヲ厭フノ私情ノ為ニ担罪羊ト為サレ
タルニ似タリ全ク其職ニ不適當ナル者ヲ撰擧セル人
ニ關係スルヲニモ非サルナリ○我輩今二時早ク発シ
タラシニハ航海ノ時間六時ヲ減セシナルハシ其故ハ
順風ハ十時頃ニ及ンテ止ニ其時我輩ハ辛ク海上三分
ノ一ニ達シタル耳ナリケレハ之若シ舟子カ其約ヲ踐
ミ出帆シ得ハキノ時ニ於テ速ニ我輩ヲ呼起シナハ恐
ラクハ即日箱館ニ出レカ如ク早ク森村ニ達セシナラ
シ若シ我輩豫メ知ルヲ得ハ尚早ク箱館ニ於テ舩便ヲ
得シナラン然ルニ或時ハ櫓ヲ堆シ或時ハ帆ヲ揚ゲタ
ムヲ以テ夕六時ニ至テ二十五マイル即ケ十里ナル森

村ニ達スルヲ得タリキ第九月廿五日騎馬ニ森村ヲ
発シニ十五マイル(即チ十一里ト四分三)ナル箱館ニ出
タリ新道ハ余カ曾テ見シヨリ諸事整備シニ小橋ノ外
全路皆良橋ヲ架セリ蓋シ其小橋ノ一ツハ馬車ニ狭ク
又一ツハ馬ニスラ惡シカリキ○道路ノ修繕孰ク良好
ニシテ好景況ニ至ルノ上ハ少ナクモ毎日一度ノ馬車
ヲ開キ方今馬ノ脊ヲ以テスル荷物ヲ運送セハ甚ク便
利ナルハシ○札幌ヨリ新室蘭迄ノ道路多ク整頓シタ
レ正橋梁ハ殆ト尽ク修覆中ニテ一時通行スルヲ得ス
然モ札幌ニ於テハ未タ着手セサルカ如ク
我輩ハ横濱ニ出帆スヘキ便船ナキニ付滞留ニ決シタ
○第九月二十六日日曜日ナルヲ以テ休業セリ然ル
ニ前日ヨリ催シタル暴風ハ終ニ発シ烈風雨トナレリ

我輩ハ憤発ト勉勵トヲ以テ早く此地ニ安着シ暴風
ノ免ルトヲ以テ大ニ自ラ之ヲ賀シタリ○二十七日及
ヒ奉日(廿八日)ハ余報文ヲ草スルニ匆々タリキ
第九月二十九日箱館ニ於テ記ス
我輩本年ハ土人ヲ多ク供セス且ツ閑暇ナカリシヲ以
テ土人ノ事ニ付見聞スルヲ甚クサナシ然レモ會計官
ハ北地出生ノ由ニテ土人ヲ多ク知り且其言語ニ通セ
ルヲ以テ同人ニ亂スニ近頃余カ聞セル英國四時出版
ノ「ナチエ」ト題スル書中(千八百七十四年第四月二
日出版第九卷四百廿八葉)蝦夷人ニ就テ云フ所ハ全ク
確實ナラサルヲ発見セリ而テ余カ補助手中ニモ亦記
事ヲ添ハタル者アリキ○洞窟中一婦人ノ涕泣セル者
一狗ノ紅花ヲ啣ミ来レルノ圖ヲ以テ解明セルカ如

土人古傳ノ由未ハ同氏曾テ聞キシトナシト云ヘリ
蓋シ是日本人ノ言傳ヘカ或ハ作意ニ出タルナルシ
各所ノ土人ハ其由未ニ付テ各異ノ傳説アリト云○土
人ノ物ヲ荷フ通常帶ヲ以テ前額ニ繞ラシ之ヲ負フナ
リ○婦人口邊ノ刺青ハ幼少ノ時ニ施ス者往々アリ
ト虽凡通常婚姻ノ時ニ於テス但手甲及前臂ニ施ス綱
状ノ刺文ハ必ス施サ、ルヲ得サルニ非ス土人ノ樂器
ハ三絃五絃及六絃アリ其絃ハ海濱ニ寄りタル死鯨ノ
神經ヨリ之ヲ製セリ○土人ハ鯨ヲ捕スルヲナシ又鯨
ハ鯨ヲ食フカ為ニ之ヲ逐フテ陸近キ淺瀬ニ致シ以テ
網スルヲ得セシムルトテ之ヲ尊敬セリ彼等又鯨ハ一
皮ニ鱗百尾ヲ食フト云ヘリ
土人ハ獵殺セル熊或ハ鹿ニテモ其肉ヲ食フニハ其死

靈ノ崇アラサシムルカ為ニ豫ノ贖罪ノ祭ヲ施行ス
熊ノ頭ハ家ニ持帰り字ニ貫キ屋傍ニ建ツ鹿ハ草葉ニ
包ミ林中ニ置キ或ハ字ニ貫キテ談處ニ建ツ○彼等カ
海蔬其他渙産ヲ日本人ニ賣ルカ為ニ之ヲ採集スルハ
野臺ノ風俗ヨリ文明ニ進歩スルノ一着ニシテ或ル村
落ニ於テハ日本人ヨリ少シク耕耘ノ道ヲ學ビ得タル
者アリ稍々學問セル土人ハ東京ニテ去ヘルトアリ土
人ノ語中ニハ農夫ニ当ルヘキ語ナシト土人ハ日本人
沿海ニ移住セルカ為ニ奧地ニ逐ヒ入レラレタリトハ
信シ難シ何トナレハ土人ノ村落ハ沿海ニ猶多クシテ
山間ニ稀ナレハ之内地ノ中央ヨリ漸々北方ニ逐ハレ
現今北海道ト虽凡最南ノ部分ニハ稀ナリト云
土人ハ大ニ蛇ヲ嫌忌シ疑ラクハ大ニ之ヲ恐怖スルニ

以タリ余ハ当夏中一度ナラス此事ヲ実見シタリ蓋シ
死地ノ最モ毒蛇ト称スル者ハ反鼻蛇ト云然レ人ヲ
殺スノ毒アル者ニ非サルカ如シ余カ記憶スル所ニ依
レハ其形稍小ナルモ亜国ノ响尾蛇ニ密似ス○我輩ハ
八月中一朝「イナキシリ」ト述傍ニ於テ一蛇ヲ見人夫
等之ヲ殺シタリ然ルニ我ニ同伴セル土人ノ一老翁ハ
既ニ死シタルモノ我等カ死スニモ関セスニ恐怖シテ
逃避セリ蛇ノ長サハ二尺五寸許ニシテ褐色ノ斑文ア
リキ○尾端ニ鈴ナルヤ否ヲ檢セシニ角状ノ鋭針アリ
テ長サハ分内外ナリキ○其蛇ニ嚙ルハ兩三日ノ疾
病ヲ起スノミニテ死ニハ至ラスト云ハリ○余ハ一日
混内ニ於テ亜国ノ「ハロオン」テツデル福袋ニ似タル
一蛇ヲ見タリ蓋シ光澤アリテ赤色多シ毒アレト反鼻

蛇ノ如クナラスト云フ○米國北東州ノ蛇ト北海道ノ
蛇ト斯ク類似スルハ恰モ兩州ノ樹木既ニ明著ナリ相
似タルト一般ナリ○本年我輩諸方ノ當處或ハ林ノ測
量ノ際一度ハ川ヲ浮游スルヲ見タリ「吾種ノ小鼠ノ夥
ナルト其馴レテ人ヲ畏レサルトニ驚怪シタリ又多ク
ノ鼈ヲ見タリ其内亞国ニ於テ見タルカ如キ縞アルモ
ノアリ又黒色ナルモアリ○本年ハ兩多キヲ以テ蟲
類殊ニ多キヲ覺ヘタリ其微小ナル萬物學上ノ物若干
ハ補助手殊ニ縮垣氏之ヲ炭酸ニ浸シテ貯ヘタリ○過
日噴火港ヲ渡ルハ凡ソ長サ十五或ハ二十尺ナル魚六
尾許我船ノ近傍ヲ過キ水面ニ浮ミ上リ又沉テ凡五噸
ハル我小船ノ下ニ行タリ我輩ハ最初小鯨ナリト思ヒ
ニ船子ハ鯨ヲ叩テ之ヲ逐ヒ曰ク鯨ニアラスカミキ

リ（カミ上ヤリ切リ）ニシテ其脊ノ曲リテ尖リタル鱗ハ
堅ク鋭クシテ鱗ヲ襲ヒ之ヲ刺シ殺ス一尚劍ヲ以テス
ルニ異ナラスト

第十月七日東京ニ於テ記ス

第九月廿九日ハ次報文一部分ヲ記シ三十日モ亦匆忙
之ヲ書シ荷物ノ大ナル者ハ蒸氣船ニ積込タリ○第十
月一日残リノ荷物ヲ荷造メ刻太平丸ニ乗組タリ而テ
天氣都合ヨク三日ナラスシテ横濱ニ着セリ○到着ノ
夜（十月四日）直ニ出府セル者アリ蓋シ餘ハ刻限後レタ
ルヲ以テ翌朝迄横濱ニ滞在セリ

余ハ地質補助手稲垣、末田、三澤、高橋、賀田、坂、嶋田、山、前
、西山諸氏ノ事業ニ勉勵ニシテ信實ナル一甚々満足
セル旨ヲ述サルハカラズ彼等カ余ニ十分ノ補助ヲ与

ヘタルハ実ニ余深ク感佩ナル所ナリ余ト事業ヲ共ニ
ニル者名ハ死ト不絶苦役セラレタレ正當ニ其要スル
所ニ甘役シ非常ノ勉強ヲ為セリ自餘ノ五名ハ親共
ニ在ラスト虽モ等シク誠實勉勵ナリ余カ疑ヲ容
レサル所ナリ

拜具謹言

開拓使地質兼鑛山士長

邊、士、末曼

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, covering the left page of the manuscript. The text is arranged in several lines, though the characters are somewhat faded and difficult to decipher. There are some ink blots and stains at the bottom left of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, covering the right page of the manuscript. The text is arranged in several lines, though the characters are somewhat faded and difficult to decipher. A large rectangular area in the center of the page is enclosed by a blue border, containing vertical lines that suggest a table or a structured list. There are some ink blots and stains at the bottom right of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, located at the bottom right corner of the right page. The text is partially cut off by the edge of the page.

